月例研究発表要旨

第 286 回　2020 年 1 月 31 日
『統語的曖昧性を解消する韻律的手段：東京方言と近畿方言』

五十嵐陽介（報告者）
広瀬由紀（共同研究者）

本発表は，31 回日本音声学会全国大会ワークショップ「プロソディ研究のための方法論：コーパス・生理・文タイプ」（2017 年 10 月 1 日）で発表した広瀬由紀氏との共同研究の概要の報告である。

日本語東京方言において，統語論における枝分かれ構造の違いが韻律に反映されることが知られている。この統語論と韻律との関係は，「右枝分かれ構造が埋め込まれた統語境界において，基本周波数（Fo）の立ち上げが起こる」という形で定式化されている（Kubozono 1988）。この写像関係は他方言にも観察されるが（前川 1997；松浦 2016），大阪方言を中心とした近畿方言に関しては，枝分かれ構造の違いが Fo に明瞭に反映されないという報告がある（杉藤 2001；郡 2006）。近畿方言において枝分かれ構造の違いが Fo に明瞭に反映されないのはなぜだろうか。その理由を近畿方言におけるアクセント体系に求める仮説がある。この仮説によると，近畿方言は，対立するアクセント型の数が他の方言より多いので，Fo は専らアクセント型の区別に用いられ，このことが，統語構造に従って文レベルの Fo を変動させることへの制約となるという（杉藤 2001；上村 1997）。ではポーズはどうであろうか。大きな統語境界には頻繁にポーズが置かれる傾向があることが知られている（Cruttenden 1997）。近畿方言では枝分かれ構造の差異がポーズの差として実現されるのであろうか。この問いに答えるために本研究は，文を構成する語は同一であるが，枝分かれ構造が異なる曖昧文を，東京・近畿両方言話者に発話させる産出実験を行った。

話者は，東京方言話者 7 名，近畿方言話者 6 名であった。合計 36 文のテスト文（2 種類の枝分かれ×3 種類のアクセント型×6）を話者に読ませ，発話されたテスト文を録音した。録音された音声から Fo を抽出し，またポーズ長を計測した。Fo のみあるいはポーズのみで曖昧性が解消されるか否かを検討するために，それぞれを独立変数とした判別分析を行った。

Fo によって枝分かれの違いを判別する判別分析の結果，東京方言ではすべてのデータセットで有意な正準判別関数が得られ，正判別率は 86.9% 以上であった。一方，近畿方言ではいかなるデータセットでも有意な正準判別関数は得られなかった。ポーズによって枝分かれの違いを判別する判別分析（強制投入法）の結果，両方言ともに，すべてのデータセットにおいて有意な正準判別関数が得られたが，正判別率には方言差がみられた。正判別率は東京方言では 83.3% 以上であったが，近畿方言では 68.6 % 以下であった。

実験結果は第 1 に，先行研究の結果を再現し，近畿方言では統語的枝分かれ構造が Fo によって明瞭に区別されないことを示した。第 2 に，近畿方言では，枝分かれ構

造の違いがポーズによっても必ずしも区別されないことが示された。近畿方言において左右枝分かれ文の間の Fo の差が小さい事実は，アクセント制約仮説によって説明することができる。しかしながらポーズの頻度が近畿方言において低いことを示した結果は，アクセント型の数とは無関係に，統語論と韻律の写像規則に方言差が存在していることを示唆している。

Cruttenden, A.（1997）*Intonation*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Kubozono, H.（1988）The Organization of Japanese Prosody, Ph.D. dissertation, Edinburgh University.

上村幸雄（1997）「日本語音声の歴史的なふかさと地域的なひろがり」杉藤美代子（監），佐藤亮一・真田信治・加藤正信・板橋秀一（編）『日本語音声 1：諸方言のアクセントとイントネーション』，pp. 21-61，三省堂。

郡史郎（2006）「韻律特徴の地域差」，広瀬啓吉（編著）『韻律と音声言語情報処理――アクセント・イントネーション・リズムの科学』，pp. 50-64，丸善。

杉藤美代子（2001）「文法と日本語のアクセントおよびイントネーション――東京と大阪の場合」音声文法研究会（編）『文法と音声』，pp. 197-210，くろしお出版。

前川喜久雄（1997）「アクセントとイントネーション――アクセントのない地域」杉藤美代子（監），佐藤亮一・真田信治・加藤正信・板橋秀一（編）『日本語音声 1：諸方言のアクセントとイントネーション』，pp. 97-122，三省堂。

松浦年男（2016）「二型アクセント方言のイントネーション」日本音韻論学会（編）『現代音韻論の動向：日本音韻論学会の歩みと展望』，pp. 100-103，開拓社。